

## ニホンミツバチのアカリダニ症浸潤状況調査及び衛生指導

紀南家畜保健衛生所  
○藤原美華 谷口俊仁

### 【管内ニホンミツバチ（和蜂）農家の状況】

2019年1月1日届出状況より農家戸数は242戸、飼養群数は1,105群であり、個数、群数とも古座川町での飼養が最も多く、全体の30%以上を占める。次いで、田辺市、日高川町であり、この3市町で全体の半数以上を占める（表1）。

巣箱は、重箱式巣箱、ゴーラ式巣箱もしくは両方の巣箱を用いて飼養しており、いずれの巣箱も農家自身により手作りされたものである（写真1）。

### 【背景】

2010年、和蜂でのアカリダニ症の発生が長野県で報告されて以降、2014年頃までは関東甲信越（東日本）を中心に感染が拡大していた。近年では全国的に感染が拡大し、近畿地方でも本県を除くすべての府県で発生が報告されている。

### 【目的】

当家保管内におけるアカリダニ症浸潤状況調査と和蜂農家における飼養、衛生管理を調査し、これらの調査をもとに問題点を洗い出し、飼養、衛生管理について改善、指導を実施することを目的とした。

### 【方法】

方法①：管内和蜂農家から無作為に8農家を抽出し、生死を問わず、1農家あたり5～30匹（合計200匹）の和蜂を採取した。すべての蜂に対し、解剖にて気管を取り出し、顕微鏡下で観察し、アカリダニの寄生状況を調査した。ミツバチの解剖手順に従い解剖し、取り出した気管をスライドガラスに乗せ、顕微鏡下で観察した（写真2）。

方法②：事前に作成した調査票を基に、聞き取り調査を実施した。主な調査項目は、飼養年数や目的、家保の認知度、疾病に対する知識の有無、現在抱えている問題点等についてである。次に飼養環境、衛生管理状況調査を実施した。さらに、巣箱の内部調査として目視、臭気について調査した。巣箱の内部については、さらに詳しく見るため、ファイバースコープを用いた。最後にこれらの調査を基に問題点を洗い出し、改善のための指導を行った。

### 【結果】

結果①：採取した和蜂の気管を顕微鏡下で観察したところ、今回抽出した8農家すべての検体において気管の変色及びアカリダニの寄生は確認できなかった（写真3）。

結果②：飼養年数は3年から15年とさまざまであった。

飼養目的は、自家消費のみが63%、物産店等での販売が38%という状況であった。家保の存在、認知度及び疾病に関する知識の有無は13%と低く、平成26年度に当所で50戸の農家を対象に実施した調査結果でも26%と低かったことから、まだまだ認知度は低く、改善が必要であると考えられた。また、現在抱えている問題点として、いずれの農家においても、今年は蜂群の崩壊が著しかったという回答であった。それらの原因の内訳として、スズメバチによる襲撃、スムシによるもの、蜜枯れによるものの3つに大別できた。

飼養環境、衛生管理状況調査より、蜂群の崩壊、逃避した巣箱を放置している農家がすべての農家で、また、空き巣箱の洗浄、消毒の未実施も75%と高く、衛生管理に問題があることがわかった。

次に、巣箱の内部調査では、巣板の掃除が不十分であった農家が88%、蜂群の衰退、未発達の子が88%であった。また、バロア病（ミツバチヘギイタダニ）の寄生は確認されず、腐蛆病を疑う症状や臭気についても確認できなかった。最後に今回の調査で洗い出した問題点に対する指導として、農家向けにできるだけわかりやすく資料を作成し、アカリダニ症の感染有無の検査結果とともに説明を実施した（資料1～5）。

#### 【考察】

今回の調査でアカリダニ症の感染が認められなかったことから、当所管内での感染確率は低いと推察できた。また、飼養環境、衛生管理についての意識向上、疾病に対する知識の獲得、家保の認知度の向上、飼育届提出の遵守について農家に理解してもらえたと考えている。

#### 【今後】

今後も引き続き、本症の浸潤状況を調査するとともに、和蜂農家の衛生意識の向上を目指し、効果的かつ積極的な指導に努めたいと考えている。家保は和蜂養蜂農家にとっても身近な存在であることを認識してもらおうとともに、家保との連絡体制の構築と疾病の早期発見によるまん延防止に努めたい。